

富來隆教授の逝去をいたむ

中野 幡能

二〇

教授は大正七年の生まれで本籍は大分市だが、その祖先の故地は国東郡富來で、先生は足利尊氏を迎えたという。父君の仕事の関係で中学迄は東京で終え、昭和一五年五高文科甲類を卒業、昭和一七年東京帝国大学国史学科を卒業した。卒論は、「中世起請文の研究」だったときいている。ついで、同大学大学院に入り二三年中退、東京帝大史料編纂所々員より昭和二四年大分師範学校教授となり、大分県に帰られた。続いて同二五年大分大学社会学教授、同五六年大分大学退官、名誉教授となり、その年九州東海大学教授、六三年退職、大分市文化功労賞(昭四八)、勲三等旭日中綬賞(平三)を受けている。教授の業績として当時有名であったのは、『史学雑誌』に「耶馬台宇佐説」を発表されたことであつた。これについて、『耶馬台女王国』(昭三五)、『卑弥呼』(昭四五)となり、「古稀記念論集」『豊国の歴史を彩る英雄たち』(昭六二)となっている。その他教授の力説していたのは、故郷の「丹生旧石器」(「社会理解の方法的基礎」)があり、ほか大分大教育(文部省特定研究)六冊。共編としては『大分県史料』、『大分県史』(県)、『大分の歴史』(大分合同新聞社)。そのうち近代編は教授が最も得意とする分野であつた。筆者は在学中、教室では全く知らなかつた。教授と密接に交流するのは昭和二五年、県教育委員会の研究所に移ってからであつた。昭和二六年飯田教育長、米田貞一学校教育課長の下で、大分県史料刊行会の発足、翌二七年本格的体制で、監修委員竹内理三博士、編纂委員渡辺澄夫博士や富來教授、賀川教授等の編成による可動後であつた。特に一期事業では大分県下の中世文書の採訪、編纂出版であつたので、大分県下を一緒にすることもあり、また宇佐神宮に宿舍、杜家文書の校合に当たることがたびたび行われた。たまには宇佐の拙宅に泊まって頂くこともあつた。この間委員の方々と県史料編纂を中心に様々の苦楽を共にする。このような中に「県地方研究会」のことなども生まれた。宇佐神宮編年史料の編纂には、真剣など協力が続いたが、完結しないうち突然のように平成十一年三月五日永眠されてしまった。葬儀に参列した私は、先に竹内・渡辺両博士、続いて富來氏とのお別れに、感無量の思いをいだきながら、永遠のおわかれになつてしまつたのであつた。